

ゴーリキイに関する覚え書

<コロレンコとの交友をめぐって その3>

松 本 忠 司

1. 「大学」時代
2. 放浪と摸索の時代
3. 作家的出発の時代
4. 新聞記者時代
 - 1) 1895年前半 (以上前回掲載)⁽¹⁾
 - 2) 1895年後半以降
5. アカデミヤ事件 (以上今回掲載)
6. 大 革 命 期
7. 晩 年

4 (承 前)

《パスカレロ》, 《ドン・キホーテ》, 《ピエロ》, 《ドヴァゲ》などの A. M. ペシコフ (M. ゴーリキイ) の筆名に, 《イエグディル・フラミーダ》 (Иегудиил Хламида) という署名が新たに加わったのは1895年7月14日付《サマーラ新聞》第149号からである。

フラミーダにとって新聞論説, 時評の課題は, 「暗黒と蒙昧の荒涼たる雑草群に潜む多種多様な野蛮性をあばき出し, これを正確に狙いたがわず叩く⁽²⁾」ことであった。諸悪の根源が奈辺にあるか彼は充分に知っていたが, それを公然と語ることは許されなかった。あらゆる文筆活動の前に厳重な検閲が立

(1) 小樽商大人文研究第20輯および第24輯。

(2) M. Горький. Собрание сочинений в тридцати томах. Том 23.

Москва. 1949—1955. стр. 12. (以下 C. c., т. 23. с. 12. と略記する。)

ちふさがり、取材も表現も検閲の許す範囲内にとどまらなければならなかった。当時を回想しつつ、ゴーリキイがフラミーダの活動を「くだらぬ仕事ぶり⁽¹⁾」と評しているのは故ないことではない。

それではイェグディル・フラミーダは何をとりあげ、どのように書いたか。

19世紀なかばにはサマーラは人口1万～1.5万の地方小都市であったが、40年ほど後のこの時代にはすでに10万を越える産業都市に成長していた。このような急速な発達はその当時としては異例であり、サマーラは《ロシヤのシカゴ》と呼ばれたものである。町を支配するのは《百万長者》と呼ばれる一握りの大商人——1,000～2,000ヘクタールの土地を所有する製粉工場主、穀物業者、酪農業者である。かつての家畜と穀物の仲買人である《百万長者》たちは無学ではあったが、市議会と自治体を形成しつつ町を掌中に握りしめていた。「議会では《旦那衆》が一切を切り盛りする。ことが彼の利益にかかわるならきわめて強引に切り盛りするし、ことが町の利益にかかわるのなら……やはり、自分の利益のために、それに劣らず強引に切り盛りする⁽²⁾」《旦那衆》に不利な議案は果てしなく長びく委員会の駄弁のうちに葬られ、《旦那衆》の税滞納は慢性的に膨脹し、ごくまれに行なわれる彼らにたいする裁判は掛け合い万才以外のなにものでもない。自治体職員は《旦那衆》には媚びへつらい、市民の前では尊大に威嚇しつつ間断なく市民の財産を掠め取る。《旦那衆》の周辺には、そのおこぼれを狙って、なにがしかの資本を元手に二流三流商人が蝟集し、トロイツキ市場にたむろする。彼らにとっては出店の暗い照明は粗悪品を売りさばく手段であり、市場全体の汚穢と悪臭は「客足の回転を早くする」手段である。一方、町の小市民層は倦怠と生活の空虚のために無意味な日常を惰性的に繰り返す。彼らの灰色の生活に多少のいろどりを添えるものといえば、深夜目的もなくトロイカを暴走させるこ

(1) C. c., T. 15, c. 42.

(2) C. c., T. 25, c. 109.

と、二階の窓から通行人の頭上めがけて猫を抛ること、一枚の鏝銭をめぐって往来狭しと掴み合いを演ずること……

こうしたすべてがフラミーダの題材となり、地方社会の野蛮な生活風習の典型として人々の前につきつけられた。彼の言葉によれば、ほとんど毎日のように、彼の文章によって人格を傷つけられたと考える多数の市民からの誣告を彼は郵便で受け取った。「私は社会の静寂を破ってはいない、——フラミーダは皮肉をこめて書いている。——その平穩をゆすぶりかき乱したいと心底願っているのだが……⁽¹⁾」しかし、町の有力者たちに対する彼の辛辣な筆誅は、彼の雇主である新聞の出版者をしばしば窮地に陥し入れかねなかった。「……出版者の С. И. コスチューリンは、私が時には彼に必要な人々を侮辱したということで、私に腹を立てました。私に好意的でしたが、それでも非常に怒ったものです。⁽²⁾」

この時期のゴーリキイにとって社会生活のもっと重大な側面を採りあげることには大きな困難が伴った。フラミーダが大工場の秩序や労使関係に触れるが早いか、検閲は、「彼の文章から肋骨を抜き取り」、「雑多な、言葉が不可解に撚り合わされた奇怪なごった煮の粥のようなもの⁽³⁾」に変えられるのであった。厳重な箝口令のもとに、読者に伝えなければならぬ問題が眼前にありながらこれを語れぬもどかしさ、——こうした意味でフラミーダの仕事は、ゴーリキイにとっては、「くだらぬ仕事ぶり」であった。

しかし、フラミーダは、寓話や比喩の形をかり、官憲を直接刺激しない言葉と表現を用いることによってしばしば検閲の網目をくぐり抜けることに成功した。例えば、——カブト虫とアリがせっせと働いている状景を描き、そこにロシア各地で胎動しつつあった生活変革のための活動を暗示しつつ、「われわれが生活を《できるだけよく》建設すべく努力しないのはただ倦怠

(1) «Самарская газета». 1895. №. 203. В кн. «Горьковские чтения». 1959. с. 342.

(2) Там же. с. 342.

(3) С. с., т. 28, с. 14.

に毒されているからではあるまいか⁽¹⁾」と彼は読者に問いかける。また、検閲の問題に触れて、「この道には往来を妨げる赤い石（検閲官の赤鉛筆—松本）が横たわる……それらを越えて時評文作者が公衆のところまで明瞭かつ正確な形で到達することに成功するのはごく稀れでしかない。そして、俗衆の大多数が恥ずべくかつ嘲笑に価いすべく振る舞っているとはいえ、しかし、」
 「ほかの人々と区別しなければならぬ多数の人々の存在を私は知っている⁽²⁾。」と読者に注意を喚起する。《お伽話》という表題の『古い年』では、大晦日の夜、古い年のところへ人間のあらゆる属性が訪ずれる。偽善が謙遜と、巧名心が愚劣と手をたずさえてくる。倦怠が現われる、「と——一同は彼に恭しくお辞儀した。というのは彼が時代の誇りだから。」一番最後に真実。いつものとおり、打ちひしがれ、やつれ細り、悲しげな面付の彼女は控え目に部屋の片隅に坐る。古い年がこれら人間の属性たちに別れを告げていたとき、永遠の使者が駆けつけて彼の言葉を伝える。「新しい年は新しい人々が誕生するまでやってこない……古い年は経帷子を脱いで青年の衣に着替えるがいい……人々が自己の理性と感情を更新させぬかぎり、老人よ、汝は彼らとともにとどまるのだ⁽³⁾。」このように、フラミーダは年頭の挨拶として、若い世代に「自己の理性と感情の更新」を呼びかけている。

検閲官の関心が比較的薄かった児童問題においては、フラミーダはかなり露骨な形でこれを採りあげ、激しい批判を加えた。1895年9月29日付の《新聞》には、町の有力者レーベヂェフの工場で起こった少年工の負傷事故が採りあげられた。フラミーダはこの事故が恒常的な少年工虐使によることを例証し、経営者の怠慢を難詰しつつ、「これは9月24日に起こったことが、きっと、25日、26日にもどこかで《骨》が砕かれるだろう⁽⁴⁾」と警告した。これにたいしレーベヂェフは《反駁文》を新聞社に送って、フラミーダを「経営者

(1) «Самарская газета». 1895. No. 203.

(2) С. с., т.23, с. 20.

(3) Там же. т. 2, с. 210.

(4) Там же. т. 23, с. 37.

と従業員のあいだに対立をひき起そう」と企らむ「健全な出版界に潜入した病源菌」と呼んで非難し、出版者である商人コスチューリンに「《フラミーダ》よりも、実生活にもっと近く立つべきだ」と呼びかけた。10月5日、フラミーダはこの《反駁文》を新聞に公表し、レーベヂェフ工場における管理の実態を再度論評することを予告した。しかしこの予告は実現されなかった。レーベヂェフはすでに内務大臣に訴願状を送っていた。

1895年10月27日、中央出版事業監督局長は「レーベヂェフにとって侮辱的な表現を含む《サマーラ新聞》No. 208 の刊行を許可した検閲官」は「行政処分⁽¹⁾に処せられた」ことをレーベヂェフに通知している。

しかし、検閲官が「行政処分」の通達を受領する前に、フラミーダはもうひとつの労働問題を採りあげていた。市内の庄延製粉工場ではいっせいに、機械が十二分に活用されている時期であるにかかわらず、従業員の賃金が月3ルーブリ削減された。原因は凍寒期の接近である。河川航行は停止され、労働者はよりよい条件を求めて移動することができなくなる。「商人はこのことを心得ている。そして、もっと寒くなるのを待ってもう3ルーブリ削るだろう。彼は単に主人であるばかりでなく、現代のあらゆる経済状態の主人である。しかも彼はこのことを充分知りつつその理想に向かって、彼のお慈悲によって人々がまったく無償で働くであろう状態をめざしてまっしぐらに飛んでゆく。なんということだ？ おお、神よ！ 事情に明るい人々は彼の成功は彼を滅亡へと歩ましている⁽²⁾と語っているが。」

出版監督局は再度重大な関心を示し、10月10日、サマーラ県知事に、「将来にわたって、労働者と経営者のあいだに敵意を種まく力をもつ論文が地域の定期出版物に発表されることがないよう配慮されたい」という通達を送った⁽³⁾。出版監督局から直接県知事にこのような通達を送られたことは充分注意

(1) Там же. с. 416.

(2) Там же. С. 43.

(3) Там же. с. 417.

に価いしよう。

こうしてフラミーダの発言にたいする制約は次第に厳しくなっていた。真実を語ることの困難さを読者に訴えながら、フラミーダはしかし「新聞は生活のなかへ真実を導きこむ傾向をもつ、この傾向ゆえに口ごもりつつも最低の抵抗線で斗かうのだ」と語っている。

イエグディル・フラミーダの評論活動全般について検討する余裕はここにはない。⁽¹⁾しかし、上掲の彼の言葉のように、フラミーダはしばしば危険を冒しつつも「最低の抵抗線」での斗いを固守しつづけた。当時の合法出版、ロシア・ジャーナリストのあいだでかくも不撓不屈の勤労者の擁護者はきわめて貴重な存在であったし、このようなたたかいのなかから芸術家ゴーリキの巨大な成長が準備されつつあったと述べることができよう。

アシェジョフとグーセフが《サマール新聞》を去った1895年7月末から、新聞の編集もゴーリキの責任に委ねられていた。論説・時評のもっとも重要な部分を担当していた彼にとって、この仕事の追加はあまりに負担が重すぎた。8月初めのコロレンコ宛書簡にゴーリキは書いている。「新聞の編集は私には向きません。コスチューリンにはこのことを言ってあるのですが、私のほかに人がいないので強いられているのです。仕事が多くて、私は疲労困憊のていです……《行政官》、副知事などといった身の毛もよだつ社会の紳士連と談合するなんて私にはできません。⁽²⁾」

(1) «Иегудиил Хламида» の評論活動にもっぱら捧げられた研究としては次のものがある。1) С. Д. Балухатый. Первые публицистические статьи М. Горького.—«Известия АН СССР». т. III, вып. 2—3. М. 1944. 2) С. Д. Балухатый. фельетоны Иегудиила Хламида в «Самарской газете». —«Учебные записки ЛГУ. Серия филологических наук», вып. II. Л. 1941. 3) Е. В. Сухов. Цензурные дела о фельетонах Иегудиила Хламида.—Там же. 4) Сборник «Горький в Самаре». 1938. М. 5) А. Треплев. Горький в Самаре.—«штурм», 1932. 6) Илья Груздев. М. Горький в Самаре.—«Горьковские чтения», 1959. М. 7) А. И. Овчаренко. Публистика М. Горького самарского периода.—Там же.

(2) «А. М. Горький и В. Г. Короленко». М. 1957. с. 46—47.

新聞に新しい編集者を招く必要があった。以前に《ヴォルガリ》を編集し、その頃に小説の寄稿者としてのゴーリキイとも面識をもっていたドロブィシ=ドロブィシェフスキイ (A. A. Дробыш-Дробышевский) を招く問題が起こった。この間の事情について、後になってゴーリキイは次のように説明している。

「Н. П. Ашешофは突然、不意に、サマーラを去った……新聞は私の責任に委ねられた。私にはそんな用意があるわけではなかったので、たいへん苦勞した……A. A. Дробыш=Дробышевскийが《ヴォルガリ》の編集者としては失敗だったことを知っていたので、私は彼を《サマーラ新聞》に迎えることに反対し、キエフの《芸術と人生》から A. И. Купリー⁽¹⁾ンを迎えるよう提案した。」 (傍点—松本)

しかし、ここにはゴーリキイの記憶にあやまりがあると思われる。ドロブィシを迎えようという提案は、すでに新聞を去っていたアシエショフによって出されたものであるが、ゴーリキイもこれに賛成し、コロレンコに手紙を送って、ドロブィシの採用に助力してくれるよう依頼している。

7月初めのコロレンコ宛書簡には、アシエショフを《ニジェゴロド新報》に推薦方を依頼しつつ、ゴーリキイは、アシエショフにとっては、「いろいろな事情でニージニイに居場所を変えることがどうしても必要です——そして、彼の椅子にアレクセイ・アレクセーエヴィチ [ドロブィシ] を落ち着かせることができるといいのですが……A. A. も悩むことをやめるでしょう。⁽²⁾」と書いている。

しかし、アシエショフが出版者コスチェーリンに600ルーブリ以上の負債を残したまま去ったこと、彼が最初にドロブィシについてよくない先入感を与えていたことから、ドロブィシ採用の問題は難航した。8月初め、ゴーリキイはコロレンコに書いている。「コスチェーリンは A. A. [ドロブィシ]

(1) С. с., т. 29, с. 423—424.

(2) «А. М. Горький и В. Г. Короленко». с. 45.

について、新聞についてと同様の何か不愉快な見解をもっているのです。この点では H. П. [アシェショフ] に罪があります、彼自身が A. A. を《無気力な》、《気むづかしい》人間として紹介しておき、今になってやいのやいのと推薦しているのですから。こうした矛盾があるので、コスチューリンは H. П. にとっては不愉快な疑惑か何かきっと抱いているのでしょう…… H. П. よりも私のほうがドロビンをもっと近く、もっとよく知っているという私の証明はコスチューリンに信用されません、彼は私の人を見る目を信用しません（この点では彼は正しいのですけれど）、そして私が何か狡猾な策略を弄しているのだと疑っているようです…… 心からお願いします、B. Г. [コロレンコ]、どうぞコスチューリンに手紙で A. A. ドロビシエフスキを推薦してください。あなたの権威ある声なら彼を動かすでしょう。あなたの評価によって A. A. が無実の身になること疑いありません、そして《サマーラ新聞》は確固たる基盤⁽¹⁾に立つことになりましょう。」

8月7日、コロレンコはゴーリキに返信を送った。そのなかで彼は、ゴーリキの編集による新聞に現われた欠点や手落ちを指摘し、さらに、しばしば不要とも思われる摩擦をひき起こしがちなフラミーダの時評に触れて、ふたたび自制と節度を希望しつつ、編集者選任の問題に関連して次のように書いている。「……私の見るところでは、あなたの時評文は若干の抑制と慎重な態度とを付け加えるなら、今よりはるかによいものになります。だが、それはつまるところ、《サマーラ新聞》にとって、よりいっそう早急に編集者が必要だということです。アシェショフはまだサマーラにいた頃、Ал. Ал. [ドロビシ] が我の強い、気むづかしい人だという噂を聞いたと私に書いてよこしました。そのとき私は、そんなことは気にしないと答えました。アレクセイ・アレクセーエヴィチの欠点は誰にでもあるような欠点です。彼は一時《ヴォルガ報知》で仕事をし、《カザン通信》をボグダーノヴィチと協同で出しました。《ニジェゴロド新報》が彼のもとでは精彩を欠いたこと

(1) С. с., т. 28, с. 13—14.

は事実です。しかし、これは彼に協力者がなかったからで、彼自身文筆家というより編集者なのです。《サマーラ新聞》では彼の欠点さえも利益になろうと私は思います。彼はすこし気むづかしい、けれど新聞は最近あまりに軽い調子になりました、——まさに舵と底荷が必要です。ドロビシエフスキイに関するアシェيوفの見解の変化になぜコスチャーリンが驚いているのか、私には理解できません。だって彼は他人の話でのみそう考えていたではありませんか、だが今はもっと近くで知って見解が変ったのです。それだけです。」「A. A. ドロビシエフスキイはなんにもないところから新聞を創りだすような型の間人では全然ありません。よい協力者がいる場合には彼は非常に役立ちます。そして、あなたが彼と協調しなければ、あなたなしには彼はやはり何もできないのです。すべては、副次的個人的判断をわきよせて、共同の力を仕事に役立てようという共通の願望にかかるのです。そのときは、もちろん、仕事はうまくゆくでしょう。——A. A. はまさに今不足しているものを補います。熟練と文学的経験を。これは当然なくてかなわぬものです。そして、これは非常に多くのことがあなたにかかっているというところでしょね、あなたが事実上新聞の主要な協力者なのですから。⁽¹⁾」

8月10日～11日のコロレンコ宛書簡で、ゴーリキイはこう書いた。「あなたのおっしゃるとおりです、ウラヂーミル・ガラクチオーノヴィチ、A. A. なしには、あるいは概して経験ある指導者なしには、私が新聞を台なしにすることが私にはよくわかります……だが、コスチャーリンがA. A. のことをどう考えているか知れたものじゃないので、A. A. の早急の招請を強く主張することはなかなか容易じゃありません。⁽²⁾」

以上の往復書簡に見るかぎり、編集者招請の問題発生当初はどうか確かめ得ないが、問題が進展する過程においてはゴーリキイがきわめて協力的にドロビシエフスキイの招請に尽力していることは明らかである。こうし

(1) «A. M. Горький и В. Г. Короленко». с. 48—50.

(2) Там же. с. 51.

てドロビシシェフスキは9月に入ってから《サマーラ新聞》に編集者として入社した。しかし、その後において、二人のあいだには不愉快な関係が生じ、ゴーリキの記憶のなかにドロビシシについての不快な印象が残されることになる。

着任当初、ドロビシシェフスキはコロレンコ宛に、「ペシコフは立派な態度をとり、私にたいしては大きな友情をもって、率直に、親しみをこめて接しています。」と書き、「私はやはり彼の文章を、時によっては新聞の損失を招くこともありますが、できるだけ削らないよう努力しています、イエグディル・フラミーダの筆名もそのままにしています、この名前は私には気に入りませんが⁽¹⁾。」と付け加えている。

しかし、「できるだけ削らないよう努力」しているという表現にもかかわらず、イエグディル・フラミーダの論説・時評は、かつて《ヴォルガリ》に掲載されたゴーリキの最初の中編小説『不幸なパーヴェル』の運命と同様に、検閲および、それよりもっと厳しい編集者の「双手でずたずたに」されなければならなかった。

この時期の両者の関係について、ゴーリキとコロレンコの往復書簡は何も触れていないが、И. Груздевによれば、「ドロビシシ=ドロビシシェフスキは官僚型の人間で正統派人民主義者であり、ゴーリキを浮浪人あがりの、人民主義のイデオロギーの秘儀に献身しない人間として見ていた。」彼は「その文筆生活のすべてを漂泊のうちにすごした。ある出版者に追い出されては他の出版者に拾われ、町から町へ、新聞から新聞へとさまよって歩いた。このことが彼を猜疑心の強い人間に仕立てあげた……いま、サマーラでは、ゴーリキが彼の編集者の椅子を狙っているように思えた。この疑惑は彼の妻が彼にたきつけたものであった。⁽²⁾」

すでに1895年7月9日（ドロビシシ招請の問題が起こった当初）、コロレ

(1) Архив Короленко.

(2) И. Груздев. Горький и его время. с. 494.

ンコはアシェショフに書いた。「以前には彼のなかに欠点がひとつありました。彼は自分の仕事に細君の干渉を許しました。いまは全然なくなったよう(1)です。」かりに、コロレンコの判断のように、ニージニイで「全然なくなった」とするなら、サマーラでは鬱積した力をもって再発したというべきであろう。もちろん、ドロビシンの「疑惑」が夫人の中傷にのみ由来するのではなかろうが。《ヴォルガリ》時代の彼が初めてゴーリキイと面識をもったとき、ゴーリキイはまだ無名の文学青年にすぎなかった。「経験ある編集者」としての彼はそれ以来ゴーリキイにたいして「上から見下す」態度をとること(2)になれていた。しかし、ここサマーラで彼の前にあるゴーリキイは、すでに十分な経験をもつ専門的ジャーナリストとして、『チェルカッシン』その他の作品の発表によって注目を浴びつつあった作家として大きな成長をとげていた。日まじに大きく成長するゴーリキイの姿はドロビシンを羨望と不安のいりまじった焦燥へとかり立てたであろう。やがて彼は、ゴーリキイと共通の友人であるコロレンコ、アンネンスキイ、アシェショフらに手紙を送り、ゴーリキイへの反対宣伝を始めるようになった。例えば、この年の末、コロレンコ宛の手紙のなかでドロビシンはこう書いている。「ペシコフは、どうやら、こんな片田舎では低く値踏みされている、彼の名声はオデッサやペテルブルグにとどろき始めている、と腹のなかでは考えているよう(3)です。」

おそらく、このようなドロビシンの態度の変化がゴーリキイを苦しめ、

(1) Архив Короленко.

(2) «А. М. Горький и В. Г. Короленко». с. 34.

すでに1895年4月にゴーリキイがコロレンコに宛てた手紙のなかで、その後の彼とドロビシンの関係を暗示するかのような、興味ぶかい箇所がある。「私と A. A. ドロビシシェフスキイのもとに奇妙な事件が起こりました——彼は私に2通の手紙を渡しました、私はそれを M-Ряз. 駅の郵便箱に入れたのに、手紙は宛名人に受け取られていないらしいのです！

いま A. A. はすごく敵意のこもった手紙をよこして私を非難しています。私はただもうどうしようもなく、腹が立ち、はずかしい気持ちです！

腹が立つのは——ほんとうに、A. A. にたいして私に罪があるわけでないからで、はずかしいのは、彼は私にたいしてとても無礼な態度をとっているからです。」

(3) Архив Короленко.

《サマラ新聞》を去りたいという気持ちを強くしたのであろう。95年12月、過労のため病床についたゴーリキイは、アンネンスキイに手紙を送って、借金返済と療養のための費用の借用を文学者基金に申し込み、返済計画を述べながら、「マラクエフの招きでオデッサへ移るつもりです。まちがいなく返済します。」⁽¹⁾と付け加えている。しかし、この借用申し込みは不調に終わった。不調の原因にはドロビシンが関与していると思われる。彼はコロレンコに伝えている。「あなたは多分お聞きおよびでしょうが、彼〔ゴーリキイ〕はどこかへ去るとか言っているそうですね、私はそのときニコライ・フョードロヴィチに書いてやりました、それは何かの冗談だろうと……」⁽²⁾

文学基金借用の交渉の不調と、出版者コスチューリンの熱心な引き止め策とによって、ゴーリキイはなおしばらくサマラにとどまらなければならなかった。しかし、ドロビシンのゴーリキイにたいする「疑惑」はますます悪化して露骨な「憎悪」にまで昂進していった。この間の事情は、ゴーリキイが婚約者 E. П. ヴォルジナに宛てた一連の書簡によって知ることができる。⁽³⁾

1896年2月11日付のヴォルジナ宛書簡にゴーリキイは書いている。「ドロビシシェフスキイが私を中傷した。彼はセレーツキイとダヴィドフに言ったという、私が彼らおよび彼にたいして陰謀を企らみ、彼を編集部から追い出そうとし、新聞を自分の手に握り、ついにはコスチューリンの協同経営者になろうとしていると……彼は町じゅうの誰かれにこの話をばらまき、同僚にたいする私の態度を卑劣だといっている……昨日、私はこの話をダヴィドフから聞き、驚き、腹を立て、ドロビシンに釈明を要求し……そして仕事を抛り出して家に帰った。3時間ほどしたらドロビシシェフスキイは詫状を私のところによこして、これをみんなに見せてもいいし、私が望むなら新聞に掲

(1) С. с., т. 28, с. 17.

(2) Архив Короленко.

(3) Екатерина Павловна Волжина はゴーリキイとの結婚に反対であった両親によってペテルブルグやクロンシタットの親戚に預けられた。この年の8月に結婚した。ゴーリキイの Волжина (Пешкова) 宛書簡は225通以上にのぼり、貴重な研究資料として《Архив А. М. Горького》т. V に収められている。

載してもよいなどと申し出ている……私は編集部に行って、ドロブィンの手を握り、私は彼を許すし、彼が私を卑劣な行為のできる人間だと思わないでさえくれるならこれに勝る喜びはない、と言った……だが私は彼の謝罪を性急に受け入れたらしい。彼が私について言いふらしている新しい内容の詳細が私の耳に入った、——彼は私の評判を容赦しない、好きなだけ私の名誉にきたない流言をかぶせている……私はほとんど当惑している、何が理由で私にたいするこのような憎悪が彼のなかに生じたのか、理解に苦しむ。⁽¹⁾」

ドロブィンは明らかにみずから作りだした幻想におびえていたのだ。ゴーリキイの心を強く捉えていたのは、ドロブィンが怖れるような地方新聞の編集者の椅子などでなく、ロシヤの人民と祖国の運命であり、それを芸術作品のなかに肉化したいとの念願であった。そして、この仕事に没頭するのを妨げていたのがほかならぬ新聞であった。新聞は彼から1日のほとんどの時間を奪っていた。2月17日付のヴォルジナ宛書簡にれば、ゴーリキイの日程表はこのようになる、——12時起床、3時まで編集部で仕事、食事、5時～9時ないし10時まで編集部で仕事。12時～4時自分の仕事（創作）、このあと2時間ほど読書。夜半の12時から彼はやっと自分の時間をもつのである。その時間は「静かだ、全世界に私はただひとり……この仕事は論議を捲き起こすだろう。」「たくさん読んでいる、私は時勢にずいぶん遅れてしまった。以前に読んだものもあれこれ読み返す必要がある。」

2月27日付の手紙ではふたつの大きな短篇小説の制作が、3月3日には短篇『憂鬱』の完成が伝えられている。

96年4月、《サマーラ新聞》No.81およびNo.85にA. Π.の署名のもとにゴーリキイの論文『ポール・ヴェルレーヌとデカダン派』が掲載された。この論文は文学流派の問題に直接的に捧げられた、ゴーリキイの最初のまとまった労作として注目されるものであるが、このなかで彼はロシヤにおけるデカダン心酔者とは無論のこと、その批判者の見解とも鋭どく対立する評価

(1) «Архив А. М. Горького». т. V, с. 12. 1955. М.

を行なった。

「デカダン派の創造はますます繁茂する、何か不明な、朦朧とした不吉な言葉を語りつつ、奇怪な、神経病的な、神経をかき乱すソネットが雑誌の頁に氾濫する。腐敗する文化のこの歌声は葬送の鐘の音となって、過度に神経をすり減らす利己的社会に鳴りひびき、ますますそれを衰弱させている。」

「彼らの精神は率直でなく虚飾されたものであり、彼らの形式は簡明でなく美的でないが奇怪ではある。これがこの形式に同情をよび起こしているのだ。彼らには願望はあるが活力はない、そして、すべての教養社会のように、生活の奴隷であり、生活のなかで病的にもがく。」「かくして、彼ら、動揺する人々は、あたかも彼らを創り出した社会、醜惡な否定すべきものの創造において無限の多様性をつくり出した社会への復讐者のごときものであり、かくも永らく存在しつつ人類に値いする生活を創造しなかったがゆえに運命がヨーロッパの教養階級にたいして鞭うつところの鞭のごときものである。」⁽¹⁾

(傍点—松本)

デカダン派の胎頭をこのように意義づける見解は、例えば、当時のもっとも著名な批評家である人民主義者 H. K. ミハイロフスキィの見解と比べて、ゴーリキィがいかに深く、ヨーロッパ文明の根底にまで掘りさげてこの問題を見つめていたかを示すものである。ミハイロフスキィの同じ主題の論文では、デカダン派はもし発狂しているのでなければ、「巧妙老獪であるとはいえ無教養である」⁽²⁾と結論している。

ミハイロフスキィと同じイデオロギーの系譜に立つドロブィシェフスキィは、ゴーリキィの論文に否定的態度をとっていた。ヨーロッパ文学、とりわけフランス文学の専門家を自認していた彼は、ゴーリキィが「なんにも知らないくせに、彼にはもう学ぶべきものがないと自惚れている。」⁽³⁾とコロレン

(1) «Поль Велрен и декаденты». С. с., т. 23, с. 136.

(2) «Лтература и жизнь». — «Русская мысль». 1893. No. 1, 4.

(3) Архив Короленко.

コ宛に書いている。彼は新聞におけるゴーリキイの比重を考慮して論文全体を修正することはできなかった。しかし、「新聞の No. 81 に論文が発表された際、末尾の部分が著者原稿の1頁分がまるまる脱落していた。それゆえ No. 85 に論文後半部が掲載された際に、前半の末尾の部分を新たに掲載しなおした⁽¹⁾」という事実がある。この部分は、マラルメと M. バレスの論争が扱われており、論文におけるデカダン派の性格規定に関する重要な個所である。しかも、No. 81 で脱落していた箇所には著者の原稿にはよらない文章が挿入されていた。「ドロビシシェフスキイが No. 81 から、ゴーリキイの見解がもっとも鋭く表わされている頁を意識的に抜き取り、(自分の手で)文章を挿入した⁽²⁾ということは、おおいにありうる。」おそらく、ゴーリキイはドロビシシの処置に憤慨し、脱落した箇所の復活を要求したのであろう。そして、この問題を契期として彼は《サマーラ新聞》で働くことを決定的に拒絶した⁽³⁾ものと思われる。

後になって、ゴーリキイは次のように回想している。「90年代後半の《新

(1) C. c., т. 23, с. 417.

ゴーリキイの原稿では、この部分が「マラルメは、バレスの理論に反対した論文のなかで、デカダン派の名によって決定的かつ大胆に表明した。

われらにたいし法則を書きなさるな、仮説、理論、教義を作りなさるな。われらはそれをなにひとつ受け入れはしない。われらは自分の手でそうしたすべてを創造する、われらが欲するなら。だがそれまではわれらは論理も何も欲しない——それら人間のつくったすべてを、人間の知力の結晶であるすべてを。われらもバレス氏とおなじ人間だ、そして同じように書物を書くことができる。しかしわれらは単調を欲しない、今日信仰者であれば、明日は懐疑論者に、明後日はわれらは君主制主義者か革命家になるだろう、それをわれらが欲するなら。しかり、われらは欲するままに行なう、——そして何びとたりともわれらに他の行動を強制することはできない。」とあるが、新聞には「マラルメは、バレスの理論に反対した論文のなかで、読者の前に、病的にまで高揚した印象、それと不可分に結びついた想像の天才、たえまない労作によってさらに幻想的変態的規模にまで到達した想像の天才をもった個性として現われた。」と印刷された。

(2) И. Груздев. Горький и его время. с. 504.

(3) Иегудиил Хламида (Горький) の執筆による《Между прочим》の最後の論説は《Самарская Газета》4月17日号に、《Очерки и наброски》は4月21日、短篇小説は4月24日号に掲載された。

聞における人民主義的傾向》の圧力についての質問は——たいへん興味ぶかい質問です……人民主義のさすらいの勇士たちがいました。」彼らは「地方出版界のとくに積極的な活動家として、通信文を書き、通信員を養成し、彼らの原稿を編集し、概して《遺訓を保持》した。彼らの理論的武器は耳を聳するほどだったとはいえ、実戦に役立たぬほど鈍化し錆びついていることを彼らに説得するのは無益だった。

私個人についていえば、ドロビシの教育学のために前後3回にわたりはなはだ被害を受けた。96年に彼と喧嘩して、《サマーラ新聞》をとび出した……⁽¹⁾」

故郷のニージェニイ・ノーヴゴロドに帰ったゴーリキィのもとへ、以前の同僚グーセフが手紙を送り、彼の《サマーラ新聞》との絶縁を惜しみつつ、「だが、私は思うのです。あなたがドロビシエフスキィと仲違いしたのなら、なぜ彼がではなく、あなたが去らなければならなかったのでしょうか。彼はいい人間かも知れないが、ジャーナリストとしては一文の値打ちもありません。」と書き、自分が勤めている《オデッサ新報》に紹介しようと申し出ている。

《オデッサ新報》の出版者マラクーエフは、ゴーリキィの時評と小説とをすでに読んでいて、95年12月に一度彼の招請を試みたほど高く評価していた。さっそく彼は、ちょうどこの年にニージェニイで開催されることになった全露産業博覧会の取材をゴーリキィに依頼することにした。

《ニージェゴロド新報》もまたゴーリキィの寄稿を求め、5月4日付の No. 121で、チャーホフ、ミハイロフスキィの名とともにA. ペシコフの名を掲げ、彼が執筆協力を約したと報じている。この新聞にはゴーリキィのサマーラ時代の同僚アシェシォフとイエシチンがいた。彼らは最初ゴーリキィを編集陣に迎え入れる予定であったが、ここでも彼はドロビシの中傷に遭遇しなければならなかった。

(1) C. c., т. 30, с. 313—314.

96年5月後半の一連のヴォルジナ宛書簡⁽¹⁾のなかで、ゴーリキイは書いている。16日——「アシェショフに冷やかな態度で迎えられた。ドロビシンスキイが彼に便箋25枚の手紙を書いて、私を誹謗したのだ。」22日——「アシェショフとイエシチンは私にひそかな敵意をもって対している。しかし彼らには私が必要なので、彼らは私にお世辞をいう。いったい何ゆえの敵意だろう？ よくわからないが、私が彼らよりうまく書くことがねたましいようだ。」26日——「1週間後ここへマラクーエフがやってくる。アシェショフは私のことでありとあらゆる悪口を彼に告げるだろう。なんでアシェショフが私を目の敵にするのか知らないが、彼は私に関して極端に悪い見解をもっている。だが、とにかくほっとくさ。面と向かっては嬉しがらせて、裏へ廻ってくさす——人間一般の習慣だ。」30日——「アシェショフの奴が全然けがらわしい態度をとって、ドロビシンの手紙と自分の妄想とをもとにして私についての不快至極な噂を町じゅうにばらまいている。だが、こんなことで私は驚きやしない。そして私にとってたいへん悲しいのは、彼のような才能のないわけでもない人間が自分の智脳⁽²⁾の浪費と限界のために滅んでゆく⁽³⁾のを見ることだ……（中略）そうだ、С. И. [コスチューリン]に伝えておくれ。ドロビシンのアシェショフ宛の手紙のせいで私は博覧会の記事を新聞には送らないばかりでなく、さらに私の名前を表題から削るようお願いすると……名前はかならず削ること。」

ドロビシンのアシェショフ宛書簡の所在は不明である。しかし、《サマールラ新聞》時代のゴーリキイが蒙ったと同様、彼が《ニジェゴロド新報》の実権を握り同僚を追放しよう⁽⁴⁾と画策しているといった類の中傷であろうことは推察されよう。ゴーリキイはすでに地方新聞界においては傑出した存在になっていた。新聞の利益のためには彼の執筆協力を強く求めながらも、アシェショフは編集者としての自分の地位の保全のためには《予防線》として《不快至極な噂》を広めなければならなかった。彼もまた明日の糧をつねに憂え

(1) «Архив А. М. Горького». т. V, с. 18, 20, 24, 25.

る「漂泊の騎士」であった。

ドロビシはゴーリキとコロレンコの関係に水をさすことにも成功した。コロレンコはつねにゴーリキを愛していたし、彼の作品の中央への推薦にも力を惜しまなかった。しかし、古くからの友人であるドロビシやアシェンコフによる一方的な、間断ない讒訴は彼のなかにゴーリキにたいする疑惑を生みだしていった。そして、私が調べたかぎりでは、コロレンコとゴーリキの書簡往復は95年10月から1年以上にわたって中斷している。⁽¹⁾ドロビシによるコロレンコへの讒訴にたいして、ゴーリキは誤解を取り除くための努力をしたであろうか。積極的にはしていないように思われる。

96年7月2日、コロレンコはドロビシエフスキに書いている。「……ニージニでペシコフを見かけました。ほんのちらりとだけですが。このたかいで優勢を占めたのがあなたであって彼でないことは——あなたのためにも、新聞のためにも——たいへん喜ばしいことです。しかし、もしもたかいで自体がなかったら、もしも彼がしっかりした編集者の力のもとに書くのだったなら、もっとよかったですであろうこと無論です。だが、もうどうしようもありません！ それにしても彼は才能のある人です、ただし編集者の注意がおおいに必要なのです。」⁽²⁾（傍点—松本）

すでに見てきたように、コロレンコはゴーリキにしばしば手紙を送って、新聞における、一般に文章表現における「節度」を要求した。しかし、帝政ロシアのいたる所に充満する社会的不正にたいするゴーリキの憤激は、コロレンコの要求する「節度」のうちにとどまることを彼に許さなかつ

(1) 1895年の最後の手紙（10月11～12日）のなかで、ゴーリキは、コロレンコの友人が所有する土地の譲り受けを希望し、彼に斡旋を依頼しながら、ドロビシ夫人がサマラの生活に満足していないらしいと、さりげない調子で触れている。その後14カ月にわたって手紙の往復がなく、1896年10月にはコロレンコのもとへ短篇『乱暴者』（Озорник）を送り、前借を申し込み、さらにながい中斷があつて1898年にゴーリキの最初の作品集出版の際に、この作品集をコロレンコに献ずる旨の手紙を送った。

(2) В. Г. Короленко. Избранные письма. т. 3.

た。コロレンコはかつてゴーリキイに語った。「地味な合法的な仕事に、日常の文化的仕事につきなさい。専制は腐りかけているが、頑丈な歯です。その根は深く、広い。われわれの時代にこの歯を抜くことは不可能です、——われわれは最初にそれを揺すぶらなければならない。そのためには10年そこらではない合法的の仕事が必要⁽¹⁾です。」この信念にもとずいてコロレンコは文筆によってばかりでなく、不正な裁判に苦しめられる「小さい人々」のために弁護人としてしばしば法廷に立ち、官憲の圧迫と社会の不正を糾弾した。ゴーリキイはコロレンコを、「偉大な人道主義者」として終生変らぬ尊敬と信頼とを捧げているが、しかし、ゴーリキイ自身の進路は「合法的仕事」をはるかに越えて、巨大な噴火の爆発を準備する方向へと転回しつつあった。

この年、96年1月にコロレンコは《ロシアの富》の編集陣に加わってペテルブルグへ去った。これはニージニイにとっては10年間にわたる「コロレンコ時代」の終了を、「ゴーリキイ時代」の初まりを示すものであるが、ゴーリキイにとってはコロレンコのなかにわだかまる誤解を解く機会をしばらく奪い去る結果となった。3年後の1899年10月、コロレンコはС. Д. プロトポフに書いた。「ここにはいまペシコフがいます、称讃を博していますよ。今日私のところへ来ました。腹を割って話し合い、往時を思い出しました。彼は実に立派です、そして、私は彼とふたたびずっと以前のように別れました。⁽²⁾」

5

1899年4月、プーシキン誕生百年祭を記念して、ロシア科学アカデミヤの露語露文学部に名誉会員の制度が定められた。1900年1月第1回の選定が行なわれ、レフ・トルストイ、コロレンコ、チャーホフ、ジェムチュジニコフ、コーニなど8人の高名な文学者が名誉会員に選ばれた。第2回は1900年12月

(1) «Время Короленко». С. с., т. 15.

(2) «А. М. Горький и В. Г. Короленко». с. 206.

К. К. アルセーニエフ, П. Д. ボボルィキン, В. В. スターソフが選ばれた。第3回の選定は1902年2月に行なわれた。1902年3月1日付の《官報》は A. В. スホヴォ=コブィリンとゴーリキが名誉会員に選ばれたことを報じた。⁽¹⁾

保守派のジャーナリズムはこの選定に大きな衝撃を受け、選定撤回を要求する一大示威行進を展開した。「下層」出身で、「危険思想」である社会民主主義の理念に近く立つ作家ゴーリキを選んだことは、「忠良な全ロシア」にたいしてアカデミヤの手で投げつけられた挑戦として、「すべての天才にたいする嘲弄、アカデミヤ200年の栄光を侮辱するもの」として保守派を憤慨させた。

3月5日、内務大臣シプチャーギンはニコライⅡ世のもとに3月1日付《官報》およびゴーリキに関する警察の調査資料を提出した。皇帝はこの報告

(1) Жемчужников, Алексей Михайлович (1821—1908)— 詩人。50年代から《Современник》で活躍。80年代の《沈滞期》において、若い世代に社会的不正への抵抗と人民への奉仕をよびかける少数の民主主義詩人の一人であった。主著 Стихотворения. т. 1—2. Песни старости, Прощальные песни.

Кони, Анаторий фелрович (1844—1927)— 著名な法律家。元老院議員、革命後はソヴェト国会議員。革命前の法曹界に自由主義的傾向を導入することに貢献があった。1878年のザスーリツチ事件における弁論はとくに有名。作家たちとの親交が深く、5巻の回想記『На жизненном пути』は19世紀後半以降のロシア文化全般の深い観察を示すものとして注目される。

Арсеньев, Константин Константинович (1837—1919)— 法律家、文学史家、批評家。裁判事件を扱った随想・記録の著述が多い。のちに《Вестник Европы》の編集者。主著《Критические этюды по русской литературе》。

Боборыкин, Петр Дмитриевич (1836—1921)— 当時もっとも人気のあった作家の一人。自然主義風の作品が多数ある。

Стасов, Владимир Васильевич (1824—1906)— 芸術学者。19世紀のロシアにおける最大の芸術文化活動家の一人。音楽・美術における民族的基盤と方向を理論づけた。

Сухово-Кобылин, Александр Всильевич (1817—1903)— 劇作家。ゴーゴリ・リアリズムの後継者。主要作品 Картины прошедшего. Свадьба Кречинского. Смерть Тарелкина.

書にきわめて意味深長な文字を書きつけた——「独創を超える」と。皇帝はすぐさま文部大臣ヴァンノフスキイに指令を送った。「この選定にあたり、尊敬すべき賢者諸子が何を準拠としたか理解に苦しむ。

ゴーリキイの年令も、彼の微々たる作品もかかる名誉ある称号に彼を選ぶ十分な理由を満たすものでない。

彼が審問中にあるという状態はさらに重大である。そして、現今の騒然たる時勢において、かくのごとき人物を科学アカデミヤがその構成にあえてみずから選定を行なうとは。——わたしはこれらすべてを深く憂慮し、わが命により、ゴーリキイの選定が無効である旨布告するよう貴官に委任する。

この処置によってアカデミヤの精神状態をすこしなりとも正気に戻すことを希望する。⁽¹⁾」

皇帝の憂慮を裏書きするかのよう、この日、ペテルブルグの宮殿の外では非合法宣伝ビラが撤かれていた。《鉦山学校の学友諸君へ》と題するこのビラは『鷹の歌』の一節「雄々しきものの狂気をわれら讃えて歌にうたわん」を引用しつつ、「専制打倒！自由万歳！」と呼びかけていた。

3月9日、文部大臣はロシア科学アカデミヤ総裁 K. K. ロマノフ大公に次のような手紙を送った。「皇帝陛下は本官に御下命なされた。帝立科学アカデミヤの露語露文学部および美文学部門の合同会議にたいし、アレクセイ・マクシモーヴィチ・ペシコフ（筆名《マクシム・ゴーリキイ》）、をその構成に加えるとの上記合同会議の決定に陛下はいたく憂慮なされている旨伝えるものである。このことを大公殿下にお知らせしつつ、陛下の御命令の実行に必要な措置を講ぜられるようお願いいたします。⁽²⁾」

翌10日、《官報》にはゴーリキイのアカデミヤ名誉会員選定は、彼が「刑事訴訟法1035条による審問中」であることを合同会議が「知らなかったとい

(1) Г. А. Князев. Максим Горький и царское правительство.— «Вестник АН СССР». 1932. № 2. с. 33—34.

(2) Архив АН СССР (Ленинград).—В кн. Летопись жизни и творчества А. М. Горького. т. 1.

う事情にかんがみ」無効とされるという布告が掲載された。同じ日、内務大臣はロマノフ大公に、「1) 今日じゅうにすべての新聞にゴーリキィに関する政府の告示が《帝国科学アカデミヤより》という表題のもとに印刷するよう通達し、2) すでに地方各都市へ通報を送った電報通信社は同趣旨の追加電報を発送するよう、3) 《官報》が殿下の希望された表題のもとに新たに告示を掲載するよう」手配したと通知した。こうして12日付の《官報》にはアカデミヤの名によってゴーリキィ選定無効の告示が再度掲載された。

当時ゴーリキィはクリミヤ半島のオレイーズに滞在していた。彼は前の年の4月に学生運動に関与したかどで検挙され、5月からはネージニィでの「屋内監禁」のもとにあった。その後官憲から追放地をニジェゴロド県のアルザマス市に指定してきたが、ゴーリキィは病氣療養のために1902年春までクリミヤで暮したいとの請願を内務大臣に出し、1902年4月まで「ヤルタ以外の土地」という条件で認められたのである。3月15日、彼のもとへ、科学アカデミヤ総裁の依頼によるタヴリーダ県知事代理からの名誉会員選定通知書の返還を求める手紙が送られてきた。ゴーリキィは次のように回答した。

「 タヴリーダ県知事代理閣下

私がアカデミヤ名誉会員に選定されたとの通知は直接アカデミヤから私のもとに送付されました。この通知の返還に関してはアカデミヤが直接私に請求しなければならぬし、アカデミヤが書類の返還を私に請求しなければならない理由を正確に——美文学部門制定に関する規定をもとにして——記述し、この請求を説明しなければならぬと考えます。

この手紙をアカデミヤにお伝えくださるよう謹んで閣下にお願ひします。

A. ペシヨフ⁽¹⁾」

同じ頃、ポルタワに滞在していたコロレンコは、皇帝の意志によるゴーリキィ選定無効の処置に激しい憤怒を覚えていた。さきにアカデミヤの依頼を受けてゴーリキィを名誉会員候補として推薦した当事者である彼は、この事

(1) C. c., т. 28, с. 238.

件を純粹に學術的機關であるべきアカデミヤの事業にたいする行政機關の不当な介入として、政府による新しい、大規模な弾圧の前兆として注目した。ペテルブルグの友人たちに詳細な事情の説明を求める一方、コロレンコは3月14日にゴーリキイに手紙を送った。この手紙のなかで、コロレンコは、《ロシヤの富》編集部で企画中のゴーゴリ記念特輯のためにゴーリキイの執筆を依頼するとともに、アカデミヤ事件に触れて、「選定《破棄》を電報で知りました。しばらく何のことか理解できず、ただちにペテルブルグに説明を求むと書きました。いずれにせよ——明白なことはひとつ。名誉会員の選定の本質は選定自体にあります。これは官等も、報酬も、義務も伴なうものではないが、選定の事実は何ものによっても曲げることはできません。驚くべき《破棄》です！」と書き、さらに「あなたは審問中とのことですが、それはいつ始まったのか、いつ、いかなる形式であなたに説明されたのか、いかなる訴因が示されているのか、私に知らせてください。⁽¹⁾」と付け加えている。

3月17日頃に書かれたと思われるコロレンコへの返信のなかで、ゴーリキイは、《ロシヤの富》に作品を送ることを約束し、コロレンコの質問にたいしては次のように説明している。「私は4月16日に検挙されました。逮捕のさい検事は、刑法1035条により、《本年4月もしくは5月における労働者のあいだに反政府的動揺を喚起する目的を有するところの著述、出版および普及のゆえに》私が起訴されている、と説明しました。これは——文字どおり逮捕状の言葉です。私のところでの搜索ではなんにも見つかりません、尋問のさいに、私の再三の、執拗な要求にもかかわらず、犯罪の物的証拠は提示されませんでした。そして、逮捕状にははっきり《起訴されている》と述べられているにもかかわらず、ウーチン検事は《物的証拠》を示せという要求にたいする回答として、《われわれはあなたを起訴しているのではなく、嫌疑をかけているのだ》と答えました。この矛盾は、——あたかも物的証拠の提

(1) В. Г. Короленко. С. с., т. 10, с. 335—336.

示を拒否するがごときものとして、——尋問調書のなかで私に指摘されてあります。

それから、もちろん、250条による起訴が提示されましたが、しかし、私と同時に逮捕され告訴された人々との交友の事実はこの条項に抵触するものでありません。以上です。なお、合同クラブにおける集会および兵役勤務に処せられた学生の特赦に関する請願の作成についても尋問されました。集会は私の発起によって開催されたこと、および請願書は私によって書かれたことを認めました……タヴリーダ県知事よりの書類の写しと私の回答とを同封⁽¹⁾します。」

この手紙をコロレンコはかなり後になって受け取ったものようである。3月23日付のミハイローフスキ宛の手紙に彼は、「ゴーリキからはなぜか返事がありません。待ちきれずもう一度書きました。書留郵便で送りましたが、最近検閲が強化されています、それにゴーリキは《注意人物》です。紛失したかも知れません。⁽²⁾」と書いている。

コロレンコはすでに行動を始めていた。「選定無効」を電報で知った直後から、友人やアカデミヤ会員たちに手紙を送って、事情の詳細について説明を求めるとともに、抗議運動の必要を、選定会議の再開を訴えている。「私はいま仕事のために旅行するのは具合が悪いのですが、会議の通知を受け取ったら、何もかも抛り出して、すぐに出かけることを決心しました。⁽³⁾」と友人宛に彼は書いた。この頃ポルタワでは、さきほど県下一円に発生した土地を要求する農民の騒擾事件があって、その裁判が進行中であつた。コロレンコは弁護団の指導的存在として、農民の窮状と地主の専横を訴え、地方行政機関の怠慢を非難し、農民の擁護のためにたたかっていた。

やがて、公判のあいまに、コロレンコはペテルブルグに赴いた。彼の奔走にもかかわらず、アカデミヤ会員による大々的な抗議運動を組織する計画は

(1) С. с., т. 28, с. 288—239.

(2) В. Г. Короленко. Письма 1888—1921.

(3) Его же. Избранные письма. т. 2.

成功しなかった。ペテルブルグで彼を迎えた「学術経験にあふれ、品格高潔な」会員たちの多くは、政府の処置に悲憤慨歎はするが、みずから渦中に飛びこむ危険を冒すことを欲しなかった。コロレンコはしかし絶望しなかった。彼には選定会議再開の可能性が残されていると思えた。

4月6日、コロレンコは露語露文学部議長ヴェセロフスキ^{*}に長文の書信を送った。⁽¹⁾この手紙のなかで、コロレンコは、1) 名誉会員の選定にあたって、アカデミヤの要請によって、ゴーリキイを推薦し、かつ彼に投票したのであるから、彼の選定取り消しにあたって審議の席に出席して意見を表明する権利を当然有すること、2) 《アカデミヤより》の布告には、ゴーリキイが1035条による審問中にある事実を「われわれが知らなかった」ゆえに選定したのであり、この事実を知ったから選定が無効とされると述べられているが、コロレンコ自身はそれを知っており、それが選定の障碍になるとは思考しないゆえに推薦と投票の権利を行使したものであること、3) 名誉会員の選定は、その本質において、ロシア文学のすぐれた現象についてのアカデミヤの見解を公表することであって、文学活動以外のいかなる条件もこの選定には無関係であること、4) 以上の理由で、ゴーリキイの選定の問題の審議のために会議を招集するよう希望すること、5) 会議が開催されないとあれば、アカデミヤの名で発表された布告にたいし責任を分つことは良心が許さないゆえに、名誉会員の称号を辞退することを申し入れた。同じ日、アカデミヤ会員で数学者の A. A. マルコフも直接ロマノフ大公に意見書を送った。「ペシコフ氏の名誉会員選定破棄に関する布告を撤回もしくは訂正するために総会を開催するよう接案します。なんとなれば、第一に、この布告は

(1) Его же. С. с., т. 10, с. 337—339.

* Веселовский, Александр Николаевич (1838—1906)—文学史家。ペテルブルグ大学教授。1880年からアカデミヤ会員、やがて露語露文学部議長。革命的民主主義者(Белинский, Чернышевский 其他)の理論に反対し、純粹芸術を擁護してコスモポリチズム理論に立った。主著—Три главы из исторической поэтики, Поэтика сюжетов。ほかにボツカチオ、ダンテ、ペトラルカなどの翻訳で有名である。

ペシコフ氏の選定を事実上破棄していないアカデミヤの名において発表されたものであること、第二に、布告において述べられている破棄の理由は意味のないものであるからです。⁽¹⁾」

4月10日、ヤルタのチェーホフに宛て《アカデミヤ事件》の経過を説明しながら、コロレンコは次のように書いている。「A. H. ヴェセロフスキ（議長）宛の私の手紙の写しによって、あなたはアカデミヤ事件の本質を見てとられたことと思います……事実として次のことを補足します。選定後アカデミヤの会議が3度招集されました。第1回では、陛下がペシコフの選定を深く憂慮されていることが表明されました。第2回では選定が取り消され、第3回では——今後かかる事態が起りえぬように規約の検討と変更が命ぜられた。これはすべてアカデミヤで聞かされたことですが、その後、第2回の会議に集まった会員はすでに新聞で例の告示を見ていたというのです。初版（《官報》の）に《科学アカデミヤより》という表題はなかった、そして、陛下が個人的にこの《誤謬》を訂正するよう命じたと言われていました。こうして、皇帝の意志がわれわれのものである（すなわちアカデミヤの）名によって告示された、アカデミヤは告示の内容を審議することさえできなかったにかかわらず！ この三つの会議のいずれにも私は出席できないままに（これは短期間につきつぎと行なわれた）、ここへ来て、4月6日にヴェセロフスキに手紙を送りました。彼はそれを総裁に渡しました。ヴェセロフスキは個人的には5月初め（遅くとも15日より前に）会議を開く気持ちですが、彼は大公が語ったことばをまだ知らないのです（ついでにいうと、大公は4月6日に私の手紙をすでに読み、この問題を総会でとりあげることをマルコフ会員に禁じました⁽²⁾）。」そして、コロレンコは今後の行動計画を伝えつつチェーホフの意向を打診していた。この手紙にはヴェセロフスキ宛意見書の写しが3通同封されているが、それについて彼は、急遽ポルタフに帰

(1) Г. А. Князев. М. Горький и царское правительство. с. 40.

(2) В. Г. Короленко. С. с., т. 10, с. 349—350.

らなければならず時間がないため、チェーホフからオレイーズのゴールキイとガスプラで療養中のレフ・トルストイに手渡してほしいと付け加えていた。(クリミヤ滞在中のゴーリキイはチェーホフと連れだって、しばしばトルストイを訪ねて親交を深めた。)

チェーホフの返事は、コロレンコのところへ会いに行きたいが、妻が病気なので果たしかねるゆえ、コロレンコのほうでヤルタへ訪ねてくれまいかという内容のものである。4月20日、チェーホフはさらに手紙を送って「われわれがいっしょに行動するほうがいいと思います。相談する必要があります。」と書いた。

ヴェセロフスキイの約束にもかかわらず、会議の招集はなかなか決められなかった。この間にジュコフスキイ記念祝典の集会在が計画された。記念集会在が行なわれた後では、ゴーリキイに関する問題を再審する機会を開くのは困難であった。4月29日、コロレンコはチェーホフに、記念集会在のあとでは「アカデミヤは《通常日程》に入るでしょう。それゆえに私はこの集会在の前に回答をもらいたいのです。親愛なアントン・パーヴロヴィチ、あなたと私の二人だけになるような気がします。しかし——問題の本質からいえば同じことじゃありませんか。いずれにせよ会議が開かれることになり、あなたが自分の見解を伝えたいとお考えになるなら、必要と思われることの概要を書いて、私に送ってください。」と書いた。つづいて5月2日——「昨日、通知を受けました。議長(ヴェセロフスキイ)は《私的懇談のため、5月10日午後2時に科学アカデミヤ小会議堂で行なわれる言語・文学部および美文学部門の合同会議⁽³⁾に出席されるよう》と招いています。」

「私的懇談のため」の合同会議はなんらの結論を導き出さなかった。

5月末、コロレンコはチェーホフに会いにヤルタへ向かった。協議の結

(1) Там же. с. 343—344.

(2) В. Г. Короленко. Избранные письма. т. 2.

(2) Там же.

果、コロレンコは近い将来にアカデミヤに辞表を提出し、チャーホフは秋まで提出を延ばすことになった。この頃ゴーリキィはすでにヤルタを去って、追放地に指定されていたアルザマスへ向かいつつあった。ガスプラに住む病めるトルストイを訪問したのち、コロレンコはポルタワに帰った。

7月25日、彼はヴェセロフスキィに宛て名誉会員辞任の通知を送った。

「帝立アカデミヤ、露語露文学部および美文学部門宛。

本年4月6日、私は第Ⅱ部議長に下記の意見書を提出しました。

〔1902年4月6日付ヴェセロフスキィ宛書簡をさす——25頁参照〕

遺憾ながら、私が要請したところの、かつなんらかの明確な決定をなしえたであろうところの公式会議は開催されなかったし、問題は多かれ少なかれ曖昧なままに時機を逸してしまいました。

このことを考慮しつつ、当初の私の発言にたいし若干の補足を加えなければなりません。《告示》に触れられていた問題は関心をもたずにいてよいものではありません。1035条は、わがロシア文学史において大きな役割を演じているところの、行政的警察的圧力のゆるやかに変形された形式にすぎません。その構成に少なからず優秀な文学史家を数える会議において、私はこれに関連する事実のすべてを列挙することは控えよう。A. H. ノヴィコフ、グリボエードフ、プーシキン、レールモントフ、ツルゲーネフ、アクサーコフ兄弟をあげるだけにとどめよう。これらの作家はすべて、その時代に、さまざまな形で行政的圧力を蒙ったが、ロシア文学の世界的栄光たる A. C. プーシキンにたいする監視は、最近の伝記的研究により明らかなように、——彼を墓場へと導いたばかりでなく、詩人の死後もなお30年つづいた。^{〔註〕}か

〔註〕——（原註）前世紀70年代になつてようやくメゼンツェフ將軍は、憲兵司令としての発言によって、監視名簿を要求し、そのなかから9等官 A. C. プーシキンの名を抹消した。

くして、アカデミヤの名による告示において声明されたところの、したがってアカデミヤによって結論づけられたところの根拠は、ロシア第一等の詩人がアカデミヤに近づく道を閉ざせしむるであろう。これは過去のことである。今日においてまったく同様の結果を示すのは、名誉会員の称号が不法な制度によって、被疑者にとってなんらの保証なしに、弁護と控訴の権利なしに、しばしばなんらの説明さえなしにその決定を定める行政官庁の単なる監視によって同じように剥奪されうるということである。

アカデミヤの名で宣言された根拠の根本的意義はこのようなものであります。私はここでは1035条の一般的かつ法律的意義および今回それが適用されるに至ったところの、文学の範囲外に存する考慮を関連させることは適当でないと考えます。しかしながら、いずれにせよ、あれこれの根拠が権力の絶対的命命によって設定されているのか、あるいは、これが文学と思想の高度な関心にのみ準拠すべき使命を有する学術的教育的機関の立案と道義的責任によるものなのか、——とうてい無関心でありえぬものであります。

上述のすべてを考慮して、——すなわち、

アカデミヤの名によって行なわれた声明にはロシア文学および生活のきわめて本質的な問題が触れられていること、

これに集団的判決の形が附与されていること、

作家としての私の良心が、私の実際の信念に矛盾する見解に沈黙の承認をもって従うことはできないことを考慮して、

結局、この状態から脱する道をアカデミヤの活動の限界のなかに見いだせないことにより、——私は、アカデミヤの名で公表された《布告》にたいする道義的責任を、私になしうる唯一の形式、すなわち名誉会員の称号とともに、自分の上から取り除くことを余儀なくされたものと見なします。

それゆえ、その選定によって私に敬意を示された貴院に衷心からの感謝を表わしつつ、私を名簿から削除するとともに、今後名誉会員に数えないよう私はお願いします。

Вл. कोरोленко⁽¹⁾

ちょうど1カ月後にチャーホフは自分の辞表をアカデミヤに送った。

アカデミヤ事件のこのような推移のあいだに、ロシア文学史における、ロシア演劇史における劃期的事件が準備されつつあった。アルザマスに居住制限を受けたゴーリキは、この春に舞台で成功を博した処女戯曲『小市民』につづいて、『どん底』の完成に没頭していた。12月18日、モスクワ芸術座による初演は未曾有の大成功であった。このときの成功は、スタニスラーフスキの言葉によれば、「震駭的な」ものであった。驚愕した政府による首都および大都市での『どん底』上演禁止の措置も、ロシアの人民と知識層に深く浸透するゴーリキの影響力をもはやいかんともしがたかった。(未完)

(1) В. Г. Короленко. С. с., т. 10, с. 344—346.